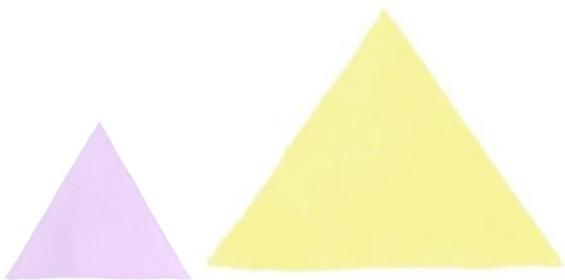


言語文化教育研究学会第 35 回月例会

多文化共生と向き合う —表象行為から見えてくるリアリティ—

発表者: オーリ リチャ氏 (千葉大学)



日時: 9月 25 日(金) 18:00~19:45

場所: 早稲田大学早稲田キャンパス 22 号館 715 教室

参加費: 無料 予約: 不要

(当日、直接会場にお越しください)

問い合わせ: monthly@alce.jp

我々は世の中の「常識」に異常のこだわりを持ち、それを疑うことはほとんどない。水が存在が当たり前である魚のように、水の外にでなければそのリアリティに気付くことはない。

我々も「常識」の枠を超えない限り、その「常識」が生み出す排除、ステレオタイプ、人種主義、差別等のリアリティに気付くことはないだろう。では、「常識」の枠を超える、とはどういうことなのだろうか。

その答えを今回は表象に求めたい。

プロクター(2004/2006)の著書『スチュアート・ホール』によれば、表象について、ホールは「現実世界は表象の外部にある。

しかし表象を通じてのみその現実世界に意味を持たせ、何かを「意味させる」ことができる。

さらに、表象は反映ではなく構成的であり、それゆえ表象には現実の物質的な力がある」(プロクター, 2004/2006, p.201)と述べている。具体例を一つ紹介しよう。例えば、「〇〇国を紹介する」という行為は、ある国に関する「常識」をただ述べているだけの無害な行為ではなく、表象によってその国に「意味」を持たせており、何かを「意味させている」のである。これが Hall (1997, p.215)のいう ‘the spectacle of the other’ であろう。

